



つながりをチカラに

2020年
2月号



埼玉県社協マスコット
「シャキたくん」

埼玉県社会福祉協議会フォトコンテスト 入賞作品 「厳寒の八高線」 山崎光隆さん(狭山市) 撮影場所: 飯能市



巻頭インタビュー

認定NPO法人 抱撲 理事長

奥田 知志さん

「家族機能の社会化」でひきこもりを孤立させない
～衣食住、愛情も支援する地域共生社会を～

エンジョイ ボッチャ

キラリ 農業法人と連携して「農福連携」に取り組む
NPO法人 めぐみの里 就労継続支援B型事業所(白岡市)

今月のキラリ

さまざまな団体のキラリとした活動を紹介



自然と触れあいながら身体を動かす農業は精神的なストレスが少なく、コミュニケーションが苦手な方も活躍できます。



出荷調整作業を行う利用者の皆さん。市外の方も含めて毎日30数人の方が通ってきます。利用定員は40人。これまで6人の就職実績があります。

農業法人と連携して「農福連携」に取り組む

NPO法人めぐみの里 就労継続支援B型事業所(白岡市)

障害がある方が力を発揮できる仕事の一つとして農業が注目されています。めぐみの里は、グループ企業の農業法人と連携することで、それぞれの専門性を活かしながら、利用者だけでなく職員にとっても働きやすい環境を作り出しています。

めぐみの里は平成25年、白岡市内に設立されたNPO法人で、就労継続支援B型事業所を運営しています。事業所には知的障害や精神障害を抱える皆さんが毎日通ってきて、ネギの生産に取り組んでいます。

取材当日、ネギ畑に何うと寒さよけのためにビニールシートのトンネルを設置する作業を行っていました。夏場は雑草取りに追われるそうです。また、ハウスのなかではネギの外葉を取り除いたり、箱詰めをしたりする「出荷調整作業」が行われていました。農作業は業務が多岐にわたるので、一人一人の体力や心身の状態にあった仕事を見つけることができます。

多種類の野菜を生産すると、作業手順などの違いから利用者が混乱するため、めぐみの里では単一の作物を生産することにしました。ネギは一年を通して露地栽培が可能であるうえに、マーケットが大きくて売りやすいという特徴があります。

利用者と職員で10数人ずつの作業チームを編成し、リーダーに従って仕事を進めていきます。利用者と職員の多くが20代の若者という年齢構成も手伝って、現場は元気な声が飛び交い、明るい雰囲気にも包まれていました。

利用者のニーズに合わせたきめ細かい就労支援を実現

めぐみの里はグループ会社の農業法人アルファイノベーション株式会社と連携し、業務の一部を請け負う形で「農福連携」に取り組んでいます。この農業法人

は農産物の生産や卸売の事業等を行い、外食チェーンや農産物加工工場と取引しています。

当初は作業に遅れが出て、めぐみの里の職員が残業することもありました。しかし現在は、両法人が話し合っただけで一週間の計画を立て、緊密に連絡を取り合いながら作業を進めています。作業が遅れる場合は、農業法人の職員が手伝うこともあります。

「二つの法人がともに『日本一の農福連携を目指そう』という共通の目的に向かっていくため、協力関係を築きやすい」と、めぐみの里の施設長、中口悠見さんは話します。

農業の専門知識や技術が必要な部分は農業法人が担い、必要な農業資材も農業法人が用意するため、めぐみの里の職員は利用者対応に専念することができます。

利用者の抱える課題や目標がそれぞれ異なるので、終業時の振り返り発表や、日誌を付けることを通して、利用者が自分の目標を認識し、職員とともに課題解決につなげるように取り組んでいます。

めぐみの里の利用者の皆さんは「自分たちは社会の一員として、社会のために役に立つ仕事をしている」という実感を得ながら、生き生きと働いています。



中口悠見施設長
「利用者さんたちが農作業を通して日々成長していく姿を見て、手応えを感じています」